

新聞とテレビ

—双方の報道現場から—

近藤和行
近藤 和行
かす ゆき

読売新聞編集委員 BS日テレ「深層NEWS」キャスター

キャスターに挑戦

一昨年の秋から、BS日テレで平日の夜に放送する1時間の報道番組「深層NEWS」で、キャスターらしきことを週2回しています。一緒に出演している日本テレビの小西美穂記者も加古川の出身です。兵庫県のコンビでやっています。

テレビの仕事を始めた関係で、最近、「いい言葉だ」と思って手帳にはさんで、返す返す見ている言葉があります。田中角栄元首相の言葉で、見習おうと意識しています。「演説は原稿を読むようなものではダメだ。聞いてる人は、始めから終わりまで集中して聞いてほしい。きっちりとした起承転結の話をしてもダメだ。話があっちは行ったりこっちは行ったりしても構わない。聞いてる人の顔を見て興味がありそうな話をしよう。30分、1時間の演説の中で、何かひとつ印象に残る話を持って帰ってもらえば、それでいい」という言葉です。

新聞は起承転結がしっかりしていないと支離滅裂になります。テレビ番組に出始めた頃は、起承転結をしっかりさせようと考えていましたが、相手があることなのでうまくいかず、やっつけて苦しかったんです。それでも、田中角栄さんの言うとおりに、ひとつ盛り上がる場所があって、「視聴者に良かったなと思ってもらえばいい」と考えるようにしたら、気が楽になりました。

新聞記者の現場

私は1984年に入社して青森支局で5、6年過ごしました。最初は警察を担当して、それから市役所、県庁を担当し

ました。5年間いけば、少なくとも1回は衆議院選があります。県レベルでのコミュニティを一通り見させて東京へ戻るのが、記者の育成方針でした。当時、新聞は社会面や地域版に、人が亡くなると必ず顔写真を載せていました。新人の訓練で一番大切なのは、顔写真を探していくこと。死亡事件があると「顔写真が取れるまで会社に帰ってくるな」と言われます。なかなか写真を入手できなくて、暗くなった街をあてもなく歩き回っていた記憶があります。特に子どもの事故の場合の顔写真は頂けなかったことを思い出します。

読売新聞では、支局で5年間、森羅万象を経験して、東京本社で社会部や経済部などに割り振られます。私は経済部に配属されました。経済部が取材するのは、国の政策と企業です。では、誰が取材するかというと、国の政策は中央省庁の官僚と自民党の部会長クラスの中堅政治家、企業は経営者です。当時の大蔵省とか通産省などの記者クラブや日本銀行、兜町の記者クラブなどを行ったり来たりしながら、経済全般を取材します。

1989年に経済部に移り、以来、ほぼ経済を担当してきました。最初の1年間は景気のいい中で取材をしました。ところが翌年にバブルが崩壊して、基本的に日本経済が軒げ落ちる取材ばかりをしてみました。思い出深いのは、昔、こちらのふれあいセミナーでも講演されたダイエーの中内功さんです。阪神・淡路大震災の前、ダイエーが好調で、中内さんは経団連でもいろいろ活動されていた。震災の直後、「俺はこんなことやっ

てられない。会社がつぶれる」と神戸に帰られた。その後、中内さんの言うとおり、ダイエーの業績が悪くなりしました。当初は「会社がつぶれる」と言う中内さんの話に、「またまた、冗談でしょ」と気楽に思っていました。後に「さすが経営者だな」と感じた記憶があります。

テレビ報道番組の現場

まだ2年しかテレビ報道の現場を見ていませんが、「へえ」と思うことがたくさんあります。新聞記者はチーム取材もやりませんが、基本的には「1人でやりたい」という記者が多いと思いますし、本来そうあるべきだと思います。テレビはチームでやる以外にやりようがありません。番組に携わる人はとても多く、テレビカメラの後ろには40、50人くらいいます。民放は必ずCMを入れるのですが、トークが長くなると「おい、早くCMいけ」と言われて、こういった番組制作のバタバタした感じが、最近では心地いいです。ただ、言葉は右から左に流れて消えるので、新聞のように何度も読み返してはもらえない。言葉が視聴者にすっと入って、すぐに理解してもらえないしやべり方、言葉の選び方が難しい。テレビの方が、より少ない言葉、少ない情報量で、複雑な経済現象を伝えるという点で非常に難しいし、「伝えにくいなら難しい経済テーマを取り上げるな」となってしまう面もあります。

ゲストが政治家の場合、番組開始の直前に来る人が多い。最初の頃は「打ち合わせなしで本番に臨めるのはすごいな」と思っていました。最近感じるのは

「政治家にとつては、こちらの質問など関係ない」ということです。私が質問をしても政治家の方は、「近藤さんの言うことも大事だが、もっと重要な論点がある」と言つて自分の土俵に持つて行き、言いたいことを話します。だから、こちらでも聞きたいことを引き出す努力をしないと行けない。新聞は、記事を書いてみて、伝わりにくいと感じたら、一晩寝かして文章を推敲することもできますが、テレビは一種のショーなので、チャンネルを変えられないように、見ている人をつなぎとめないといけない。瞬時の判断が必要になる。そこはしんどいところですよ。

新聞が生き残るには

新聞業界にとつては厳しい時代で、現場はもがいています。大きな問題は、購読者が減っていることです。「新聞は習慣性のものであるから、子どもの頃から新聞を読む習慣を身につけてもらおう」と新聞社は活動してきましたが、私は「ちよつと違ふのかな」と思い始めました。うちの子どもが小さい頃、自宅で新聞5〜6紙を購読しており、子どもも新聞をパラパラとめくっていたので「活字に親しむ子どもに育つた」と思っていたのですが、大学生くらいになると急に読まなくなりました。「ネットの方が便利だ」と、手のひらを返したようなことを言っています。もうひとつショックなのは、昔は「大学生になって1人暮らしを始めたから新聞くらい購読しろよ」というのが一般的でしたが、ここ10年ほどは、親から「新聞なんかとつてはいるのは贅沢

だ」と言われることがあるそうです。

新聞はどうすれば生き残れるのか。長年、業界が抱える課題です。新聞はインターネットに速報性ではないですね。価格も年間5万円くらいします。結構な高額商品です。それでもまだ新聞が愛されるのは、「信頼できる」からだと思えます。一問違えることもあるけど、ウソはないだろう」という信頼感が、最後の砦だと考えます。もちろん、大きな誤報事件は過去にもいろいろありました。松本サリン事件では、第一発見者の男性を犯人視しました。信頼が報道の命です。誤報は、信頼感という新聞の生命線を揺るがすものであり、新聞社は、誤報を防ぐ取り組みを強化するよう模索している最中です。

テレビの限界

テレビが抱える問題は2つあります。ひとつは、どうやったら見てもらえるのか。もうひとつはやらせです。やらせは、主に情報番組などで問題になります。放送倫理・番組向上機構(BPO)という組織でチェックしています。テレビ業界の人たちは、行き過ぎたやらせや人権侵害を非常に気にしています。矜持を持ってやっています。もうひとつは視聴率の話です。新聞社は、広告や販売部門と編集部門が切り離されているので、記者は広告の集まり具合をほとんど気にしていません。テレビは、プロデューサーが、お金の入りと番組の質を考えないといけないので、視聴率を気にします。それはスタッフにも敏感に伝わります。新聞記者から見ると、ここは辟易する点で

す。番組をつくるときに何が起きるかという「難しいテーマはあまり見てもえなからやめよう」となります。そのあたりで新聞の人間である私とテレビ局の人間とで意見が対立することがあります。

書籍・雑誌ジャーナリズムの役割

日々の新聞報道で、書けないことはいけど、書きにくいことはあります。一番書きにくいのは、例えば、沖縄の基地問題のようなテーマです。安全保障という国益の問題と、沖縄の人たちの人権・安全の問題が混ざり合つて、人々の感情や事実関係は複雑な様相を呈しています。「米軍基地は出て行け」という声の一方で、米軍関係で生活が成り立っているため、出て行かれては困る人たちもいます。日々の報道では、安全保障の問題、人権の問題の双方について、公平性、中立性に目配りしながら記事内容を構成してゆくのは、技術的にも時間的にも、物理的にもなかなか難しい点があります。まして、テレビはなおさらでしょう。原発の立地地域の問題にも、似た構造が見受けられます。

一方で、新聞・テレビが日々の報道では取り上げにくいテーマ・問題を、中長期的な視点から材料を集め、掘り下げて社会に提起する書籍・雑誌ジャーナリズムがあります。書いてある自身が本当かどうかと思う媒体や、センサー・シヨナリズムに走りすぎてその姿勢に疑問を持たざるを得ない媒体もあります。健全なジャーナリズムのためには書籍・雑誌が元気でなくてははいけないと思います。

も現状は、書籍・雑誌は瀕死の状態といつても言い過ぎではないかもしれませぬ。私たちは新聞が生き残るために、いろいろと信頼性の確保や向上に取り組んでいます。書籍・雑誌も元気でいられるよう、応援していかなければいけないと思います。



○ 講師ご略歴 ○

1962年生まれ。
兵庫県立柏原高校、東京大学経済学部卒。
1984年読売新聞社(現読売新聞東京本社)入社。
青森支局を経て89年から東京経済部。大蔵省、通産省、外務省、農水省、経済企画庁、日銀などのほか、財界、自動車・電機業界などを担当。
2007年2月から読売新聞編集委員、2013年9月からBS日テレ「深層NEWS」キャスター。
兵庫県丹波市出身。